

・合川秋穂（東京都）

濁流 全員の中にあなたがいる

日々を生きることは眼前の濁流に飛び込むことに似ている。押し流され、溺れそうなのこの世の全員のほんのすこしずつあなたであること。救えるだろうか。

・長谷川柊香（宮城県）

アイライン長し白鳥眠るに似て

白鳥のアイライン性はきつとその長く伸びた首にあるはず。目元に孤高の白鳥を眠らせながら、まばたきするたびに散る白い羽のまぼろし。

・中矢 温（愛知県）

四月も死ぬから

トランプタワー用のトランプ

四月も死ぬ、というのは、四月が終わることの比喻か、それとも誰かが三月に続き死ぬのか。トランプを組みあげたそのてっぺんから飛び降りよう。

・からすまゐ（神奈川県）

小説のミステリアスな開き方

首都高の後部座席の傾ぎ

心地よい疲れと停滞する時間のなかで傾ぐ後部座席。ゆるやかに身体を凭れさせながらあなたは小説をひらく。ミステリは本のなかでなく現実で起こる。

・いまはじまるの（兵庫県）

寄り道のカレーの話

明日からお世話になりません

また明日

してもしなくてもいいカレーの話などをして帰る道。明日からお世話になれたらきつと楽なのに、お世話にならないひとと会う明日のための「また明日」。

・こはくいろ（大阪府）

ランダムに光るかなしみ

営みを、葬るなかれ

葬るなかれ。

かなしみに規則や秩序などあるはずがない。ランダムにやってくる感情をなんとかやり過ごしながら、それでも日々を無かったことにだけはしてはいけない。

・香取小春（宮崎県）

白い、大きい、重たい犬の中に

入っついでいこう

時間を切り開いたら

真っ暗なんだ

時間の奴隷である私たちが唯一時間から逃れられるとすれば。愛することを具現化したらもしかしたら「白い、大きい、重たい犬」になったり。

・天野 若花（福岡県）

「ロン」「ポン」と

夜明けまで鳴く我が腹に

君が忘れた人質は居る

麻雀の「ロン」も「ポン」も他人の捨て牌を欲している声だ。お腹の底で人質としてとられているひととでは、可哀相だけれどアガれない。

・猫背の犬（山口県）

点滅のリズムに合わせて瞬きを
すればまだまだ緑の信号

緑の信号の点滅がやがて赤になる。止まれの予感に瞬きをして自分の心の呼吸を合わせてゆく。けれど、ほんとうはいつだって進めのサインが出ている。

・うたた（岡山県）

踏切の音が電車の中にまで
届いたらしい、ふあんになった

電車を通すため、外の世界の動きを一時停止させる踏切の音。その音のこだまがついに電車内にまでひびくとき。いつか電車も世界も全て一時停止したなら。